

愛と恋、その発生と系統 (一)

— 比較心理学的推測 —

宮

孝

一

(一)

ハアリイ・F・ハアロウが「愛の本性」⁽¹⁾という論文を発表したのは一九五六年のことである。続いてその二年後に彼は、「猿の異性愛」⁽²⁾という論文を書いている。ハアロウの目指しているのは、猿を使って愛を実験的に究明しようとする試みで、愛に関する新しいアプローチとして異色あるものであるし、実験手法も斬新奇抜なものである。前の論文の実験の骨子は、生れたばかりの子猿を母親から隔離して、布や金網で作った模造品の母親の胸からミルクが出るようにして、子猿の反応を見ようという遣り方である。子猿は代用品の胸にしがみつき、離れて遊んでも危険を感ずると急いで模造母親の胸に戻るのである。ほかに多数の補足実験を行なって、生みの母親に育てられた子猿の行動観察との比較から、例えば、子猿には母親との接触の欲求・接触の快感があるとし、こうした欲求が満たされない時、子猿の精神は正常に発育しないで性格に歪みを来すこと、端的に言えば、子猿はミルクのみにて育つものに非ずといった事実を指摘し、ひいて人間の精神発達に言及し、アメリカ社会における職業婦人の育児方式、即ちミルクビンで育てる幼児の性格が片輪になるであろう事を予想している。後の論文は更に進んで、こうした模造の代用母親

に加工して、子猿がすがりついた時、あるものは劇しく上下に振動したり、あるものは腹部から強い風を吹き出した
り、あるいは胸腹部一面に鋭いトゲを植えておいたり、つまり悪い不快な人工母親にして、実験神経症を期待したの
であつたが、これはうまく行かなかつた。一方、生みの母親も、模造母親もなく、金網の中で孤独に生長した子猿（
二歳半、三歳半）に見られる、その後の行動異常（幼児性の性行為、毛づくろい行動の欠除、度を越えた攻撃性、協
同作業や友愛の欠除など）、更にこうした母親なしに育つた猿、あるいは悪い模造母親と共に成長した猿が思春期に
達してから性行為に異常を来すこと、また母を知らぬ牝猿がともかくも母となって子を生んだ時、自分の子に対する
愛情を示さず、惨酷な仕打を加えることなどを記載している。ハアロウの構想は更に発展して、こうした性格異常の
猿、それは劇しい憤怒の発作や自閉症的と言つていい兆候を示すのであるが、そうした猿を正常の猿の群の中に導入
して集団的精神療法を施すことにまで及んでいる。彼の報告が全面的に信憑性のあるものかどうか、実験条件のコン
トロールに非はないかどうか、疑問の余地ははないが（例えば群をつくつて生活している日本猿の正常な諸行
為^③、就中その性行為の生態学的観察、捕えられた野猿の牝牝間の行動との照合。他集団に入れられると、猿に限ら
ず、通例劇しい敵視と惨酷な攻撃をうけるものであるに拘らず、ハアロウがこの点を報告に省略していることなど）、
それはそれとしてわれわれは彼の意図を同感できるし、その大胆な企画は敬表を表するに足るものである。彼の発想
のモデルは、幼児期に異常な状況にさらす事によつて非行少年的猿を作り出し、その矯正方法を求めたいのである
う。そうした考え方の根ざすところは、フロイトの幼児期の精神的外傷の仮説に発しているのであらうし、猿には分
析治療を施すわけにゆかないので、やむなく集団療法に頼つたのであらう。

だいたい愛については、歴史が始つて以来、あまりにも多くの事が言われ書かれている事は人の知る通りである。
詩・小説は言うまでもなく、評論隨筆日記の類に至るまで、枚挙のいとまもないほどである。神の愛から愛欲痴情に
至るまで、種々様々の事が記述され描写され告白され、指摘され主張されていて、もはや改めて考察するほどの事は

残っていないようにすら思われる。ところが不思議にも、近代の科学的たらんことを目指している心理学の代表的テキストを披いてみても、愛は殆んど取扱われておらず、一行の言及すらないものが多い。唯一の例外は精神分析学派の著作であるが、そこに取扱われる愛は歪がんだ性愛の諸関係のみであつて、いわば愛の病理学で生理学ではない。病的現象は、例えば胃癌は癌だという事がわかるだけで、胃の機能の理解には役立たぬと同様に、病める愛、蝕ばまれた愛はまともな愛について教えるところは少ないと見るべきであらう⁽⁵⁾。

正統の、つまり実験実証を主旨とし、客観的事実を記載し、その間に法則を定立する事を目指す心理学に於て、なぜ愛の問題は取り上げられなかったのであらうか。その答は二通り用意されるであらう。その一は、愛についてはすでに日常の見聞でその種々相が巨細の点に至るまで万人の周知するところであつて、取り立てて科学的に取り扱うほどの事が残っていないと見られる事、その二は、愛を実証的に研究する手段が、特にヒトに対しては立たないという事、換言すれば意のままに駆使し消耗できる被験者が得られないという事であり、一方愛を測定する目途もつかないという事情もある⁽⁶⁾。心理学一般の現況が以上のようなものである時、愛の実証的分析に一步を踏み出したハアロウの業績は、その故に一層珍重すべきものではある。たとえその実験手法と実施の方法に多くの欠陥を内蔵しているとしても。たとえ、被験体がリーサスモンキーであり、そこからの帰結を一足飛びに人間に転用せんとするところに多大の危険を感じさせるものがあり、更に「愛の本性」と称してはいるけれども、愛のない状況で生育した猿共の示すいわば愛の欠落症状を取り扱い、愛そのものについてのポジティブな作用、その積極面を見ていないにしても。私は不用意にも、ここに愛の作用という言葉を導入した。愛は作用であらうか。愛はある心的な状態であらうか。あるいは愛は、生物的なある力、または生理的な従つて物質的な力であらうか。

語義の詮索と定義は後廻しにして、哲学史を繙けば、われわれはそこに古くから多くの哲学者によつて愛が論じられていたのを知ることが出来る。だが、プラトンの善美に対するエロス、下つてはスピノーザの神に対する知的のア

モールに至るまで、門外漢から見れば、彼らの愛は高度に観念的な色調を帯び、われわれが日常身辺に見聞し体験する愛とは程遠いものである。哲学者の愛は、愛と呼ばれているけれども、切れば血の出る愛ではない。おそらくそれは高きものへのあこがれの中に幻の如く現われ出る、昇華された愛であろう。低い卑しい領域に、肉欲といりまじって現われる天然自然の愛を、哲学者達は取り扱う事を好まなかつたらしく、今も無視しているように見受けられる。キリスト教及びキリスト教の素地の上に展開するべく条件づけられていた近世西欧の倫理學説は、道德倫理の原理を愛（および正義）に求めている。「己の如く汝の隣を愛すべし」というキリストの素朴な訓えは、教父やその垂流の哲学の中に、天にそそり立つゴシックの会堂のように、地と万物を睥睨するかのような神の愛として、無数の飾りをつけてゴブランの壁掛のように織り上げられた。そこでは愛は不滅であり絶対であり永遠である。一度神の愛の見取図が作り上げられると、その後は逆に人間の愛がそれになぞらえて描き出され、それは当然かくあるべきものとして權威をもつようになつて行つた。キリスト教的な愛の教説は文明を背光に世界中に影響を及ぼし、現代日本もその例外ではない。彼らの神を否認する異端の試みは西欧諸国にも数多く現われたけれども、愛が疑われるということは、憎が強調されるといった事はあつたけれども、あまり聞かないのである。神の存在を疑いあるいは拒んだ人達は、神を信じ、愛を信じている人達から、あまりにも苛烈な圧迫を蒙つた。これはしかし、神を信じなかつた人が、愛においてより優つていたというのではない。ただ今もなほ愛がすべてであるかのように振舞う人を見たり、愛の名において愛が汚染されるのを見る時、愛に対して疑惑の眼を向ける人もあるであろう。愛とは何であるか。愛はどこから来るのか。真の愛と、似てはいるが偽りの愛とがあるのではないだろうか。あるいは真の愛と呼ぶべきものが果してあるのだろうか。天地創造の神話が崩れ去つた時、人はどう感じたことであろう。天動説が否定されるに至つた時、教父達は何を思つたであろう。ところで「神は死んだ」という叫びが揚げられてからも、神は依然生きている。ゴブラン織の壁掛は切り裂かれても、もとのまま壁にかかつていのである。愛は錯覚であると言う人があつた

としても、愛が生き続けることは間違いない。だが、愛と共に憎もまた生き続けるであろう。愛を絶対永遠であるとする信仰、愛の優越を認める思想、それはそれでよいものであろう。信仰は信仰であり思想は思想である。信じたい人は信じ、そう思いたい人はそう思う。傍人のとやかく言う筋合ではない。しかし愛は信念であり、思想である以前に、事実でもある。信念や思想は事実と無関係ではないが、事実を離れることも可能である。と言っても、愛の思想が愛の事実を全然無視していると言うのではない。ただ事実を事実としてみる以上に、そこには、かくありたい、かくあるべきであるという人間の願が大きく作用し、事実を過大にあるいは過少に見ているのではないかと疑われる筋はある。それを誤謬だと言うのは当たらないであらう。そうした思想は、まして信念は科学ではないのであるから。人が愛の事実について、誤認するに至る最大の原因は、人が自らは意識せずに、人間であるという自負に生きていることに由るように思われる。多くの人は、人間を生物の中の一員と考える事に抵抗し、人間を特殊な生物―神の恩寵を受ける愛子―独特の權威あるもの―万物の霊長―と見做しがちである。多くの人は人間中心主義である。丁度十六世紀以前の人が地球を宇宙の中心と考えた如くに。人は、愛を人間の特性であると思っている反面、他の一切の生物は人間に奉仕するために生存しているかの如く、彼らを無慈悲に容赦なく、毎日計画的に殺戮する事を気にもしていない。人間は他の大多数の生物と同じように、他の生物の生命の犠牲に於てのみ生存を続けているという事実は、常に意識に上らぬのである。人間は猛獣にもまさって猛獣的であり、他の生物に対し狡智にたけた行動をとっている事実を、多くの人は承認したがない。猛獣でも、その子を愛することに於いては人間に劣らず、食べる以外には他の生物を無用には殺さず、同じ種のものとは鬭争はしても、死にまで致すことはしない。人間が人間を殺す事は稀ではなく、大量に虐殺する事すらある。それにも拘らず、人間の人間に対する依怙最眞の情ははなはだ深く、物や他の生物に向ける眼差しを人間自身に向けることは容易には達成されない。人間的偏見は天性でもあるかのように、見る眼を曇らしてしまうのである。正直に言えば、愛の名に値する愛は、頻度からすれば稀な場合に人間に現われてくる現

象である。人は常に愛に充ちていることは無い。時々その状態に陥り、時々愛の行為を行うにすぎない。それでいて、人間は愛を主張し、愛を求める。人間ほど愛に飢え、愛に弱く、愛に溺れる生物はないのではなからうか。

愛の実証的研究は、先に引用したハアロウの論文の示すように、まだ開始されて日が浅い。しかし生物の生態学的研究、特に本能の実証的研究に附随して、かなりの知見が集積されてきている。それらはナチュラルリストの観察から始められたが、漸次条件分析の実験へと進んできている。これらの、直接には愛を目指していない研究からの所見は、私の見るところでは、人間の愛についての教説、その堅固に構築された防塞の土堤に、小さいながら穴を穿ち始めてるように思われる。穴明け作業は数が少なく、与えられたデータの不足は著るしいので、理論構成はまだその時に来ていないようにも思われる。それに安楽椅子に腰を下ろしてする仕事には、常に陥り易い落とし穴が随所にあるものである。ただあえて言えば、人間の愛に関する限り、いつになっても科学的なデータは十分に揃わぬことが予想される。それは前にもふれた通り、実験条件の科学的コントロール、被験者を遠慮なく消費する事が許されぬからである。日常絶えず繰り返されている愛といわれている現象、偶然に恵まれる臨界場面における観察報告、動物からの類推、これらが以下の考察に支点となってくれるであろう。ただ人間の愛を考察するに当っては、その欠くべからざる前提は、何よりも人間的な愛の偏見を棄てること、人間中心の社会的常識から離れる必要があることである。出来れば火星人の眼で、地球上の他の生物を観察すると同じ非情と冷酷とをもって、生物の一員であるヒトを眺めなければならぬ。それが果して可能な事であるかどうか、疑わしいと言えば疑わしいけれども。

(二)

愛、この言葉は麻酔的な響をもっている。現代日本語の愛は、あまりに乱用されたために酸敗し、腐蝕的なイメージを与えることすらある。愛は語原を求めれば、その発音の示す通り、日本民族の言葉ではない。私はこの方面の事に

暗く、詳しく詮索したい気持ちも持つてはいないが、愛するという言葉の文獻に初めて見えるのは、提中納言物語の中に蟲めづる姫君のくだり「この虫共をあしたゆうべにあいたまう」であるらしい。平安朝（一〇五〇年頃か）の作品だそうである。漢語の愛はまことに多義であつて、古くは親・慈・憐・恵・寵・惜の意が示されているが、男女恋慕の意は見当らない。この古代漢民族の用法はそのまま日本に移植されたものと思われ、それが上掲の蟲めづる姫君につながるものであらう。愛と恋を明確に区別した使い分けは、古代漢民族の英智と言つてよく、それはエロスとフィリア、エロスとアガペーの区別に匹敵するものである。誰がいつの頃から、愛恋・恋愛の連結語を作つたのであらう。語とその用法が乱れるに従つて、言葉とその指示する実態もまた混同されるに至つたらしい。混同させるような似かよつた実態が實際ある事も、混同の由因でもあらう。日本民族も古く、漢語の渡来以前に、古非・古布という言葉をもつていて、それは愛に相当するところの、いつくしむ・めづ・いとほしむ・かわゆがるとは明らかに異なる意味に用いられていた。日本民族も愛と恋の実質上の区別を承知していたのである。現代日本語が愛を恋の意味に用いて怪しまないのは、ことたまのさきはう国にしては、あわれなさけなき子孫共のいたらくである。おそらく恋愛の造語から始まつて、西欧系の言葉が両義を混用している事の直輸入による混乱かと思われる。まことにラブは曲物ではある。簡単な英辞書によると、ラブは九通りの意味に使われ、愛も恋も好きも一緒くたである。

私は何も好んで言葉の詮索をしたいわけではない。科学の論文用語としては、最初に定義して使つてゆけばいいのである。だが、日用語として頻繁に使われているために、愛の問題を論じているコンテキストの中に恋の意味がちらちらしたり、いつの間にか恋や好悪へ主題の力点が移つていたりしては困るからである。そうした例を、挙げよと言われれば挙げる事が出来る。それに言葉による定義は、時には定義の定義を要するものである。いったい夫婦の愛という時、それは愛なのであらうか、恋なのであらうか。ある人は恋を愛の特殊なものとして、自然の愛・直接的な愛・端的な愛などと紛らわしい言葉を作っているが、言葉の上で、論理に会わせるにはそれでいいものかもしれない。

ない。友愛とか性愛とか呼ぶ方が、より端的に意味が通ずる。が、そうした名づけ方、分類の試みが、すべて愛を最も包括的な上位概念として取り上げている点に、われわれは注意したいと思う。恋は真実、愛に包括さるべきものであり、愛の一部に属するものであろうか。愛と恋とは、心理学的記述として、意識に現われる精神状態として明らかに異なるばかりでなく、作用としての働き方、行動の表現においても明確に区別すべき概念ではなからうか。

雌雄の別に分れた生物は、脊椎動物以上の段階では発情期（繁殖期）をもっている。それは行動に現われる様相からは「さかり」（heat）と言われる状態を示し、出現し消失する時期（あるいは周期）をもっている。それは生理的には、精子と卵子の生成・成熟に関係している。フランク・A・ビーチは脳下垂体ホルモン・副腎皮質ホルモン・生殖腺ホルモンと性的行動に関する多数の研究者の実験結果を要約しているが、対象となった動物は、金魚・グッピー・蛙・蟾蛙・トカゲ・カメレオン・鳩・家禽・野鳥、それからラット・マウス・ウサギ・ハムスター・羊・豚・馬・牛・犬。霊長類についてはリーサスモンキー・チンパンジー・ヒトに互っている。もちろんヒトの場合は実験ではなく、男性女性の自省報告や臨床上の記録である。実験の手法は大別して、幼児期あるいは成熟後に去勢した動物の性的行動の発現の程度および仕方、去勢した動物あるいは未成熟動物に対して脳下垂体ホルモン・性ホルモン（多くはアンドロゲン・エステロゲン）の投与・注射あるいは腺組織の移植による性的行動の復活・発現の観察に分けられる。

結果の要は、今日では大方の予想するところと概ね一致するものであって、ホルモンによる性的行動の支配を決定づけるものであるが、特に注目すべきことは、その支配が下等動物ほど一義的に規定され、霊長類になるとサル・チンパンジー・ヒトの順位に従って、ホルモン支配が緩くなる点である。ヒトの場合は個人差も相当はなはだしいものがある。例えば成人の男性に対する睪丸切除は性衝動と性交能力の著しい減退減弱を来すという報告に並んで、施術後十年乃至二十年、何の変化もなかったとの報告もある。去勢されたサル・チンパンジーの性的能力について

は、僅かしか報告がなく、よく解っていない。幼児期に生殖腺を取り除いたチンパンジーの牝は成熟してから、受け入れる牝と好んで、また烈しく交尾したという報告がある⁽¹⁰⁾。射精は現われなかったが、アンドローゲンを与えると、それも発現したという。牝はこの点、牡と多少異なることが見出されている。サルは卵巣ホルモン濃度に対応する明瞭な月経周期を示すが、牝の交尾受け入れは、この排卵周期に必ずしも完全に限定されていない⁽¹¹⁾。飼養されているサルも野生のサルも、生理的にさかりでない時にも牝を受け入れる。同様に牝のチンパンジーがエストローゲン水準の低下している時に、交尾を催促しているのが観察されている⁽¹²⁾。稀な例であるが、卵巣摘出後、交尾の持続した報告もある⁽¹³⁾。ホルモンの性的行動の支配は絶対的ではない。しかし一般的には、サルとチンパンジーにおいては、牝のエストローゲン水準の高まっている時に交尾を最も受け入れやすく、また積極的である。ヒトの女の場合、多くはメンスのリズムに対応する性的反応を経験している⁽¹⁴⁾。しかし大多数の場合、エストローゲン分泌のピークでもなく、妊孕期でもない時に（メンスの丁度前と後に）最高の欲求がおこるとされている。卵巣摘出後、あるいは月経閉止後にも屢々性的興奮が減退せずに保持されたという報告もある⁽¹⁵⁾。以上の事実は、サルやチンパンジーに観察されたこと、ホルモンの性的行動支配の程度が一層緩められている事を示している。

一方、幼稚な前駆的性的行動は、動物が生殖可能な成熟に達する以前に出現する。牝の場合、交尾行動を構成する部分行動の二三は、出生直後にも見られる。脊髄に媒介される基本的な性的反射は、出生時に既に完成されている。（ペニス勃起・会陰部の触覚刺激に反応する交尾姿勢・腰のリズム的スラスト。ラット・モルモット・ハムスター・牛・ライオン・チンパンジー・ヒトに於て）。牝の場合、幼児期にはこうした前駆的行動をはっきりとは示さない。やや長じてからの受け入れ姿勢・性的遊戯・自慰行動は、牡と同じく牝にも現われる。性的行動のパタン、その行動能力は成熟前に潜在的に形成され準備されてある。一方、内分泌腺自体一挙に活動を開始するものでなく、漸次に成熟するのであるから、一般的に言って、性的行動がホルモンの影響の下に発現する、その支配下にあると言っても言

い過ぎではなからう。

恋は、ことわるまでもなく、性的行動と同義ではない。上の記述に出てくる性的衝動・性的興奮性と同義でもない。色情・色欲・異性愛などは、恋のある面と重なっているが、ぴったり合致するものではない。恋は恋である。異性の相手にひかれる、思いこがれる、慕い慕わしく感ずる、あるひとをいいと思う、いかに言葉で恋を説明しようとしても、所詮散文的説明や敘述で、恋を知らぬ人を納得させるわけにはゆかない。「惚れる」は端的に、まぎれもなく恋の意味を指し示す唯一の言葉である。それは体験される心意の状態を表示していて、体験するよりほかに他人にわからせるわけにゆかぬものである。恋は「故布というよりはあまりにて、われは死ぬべくなりにたらずや」である。無我夢中であり、恍惚であり、灼熱であり、行方も知らぬものである。身を切られる苦痛と天にも昇る歡喜の交代するものである。言葉で恋を表現し裝飾するために、詩人は天の星野の花に仮託し、世界の文学作品の大半は恋慕の情を述べ伝えるためにあるかのようなのであるが、所詮それらは言葉の上の事で、文盲のおとめも、いつか恋を知るようになる。味も素気もない言い方をすれば、ヒトも他の動物共と同様に、成熟の近づく頃に「さかり」の状態に陥るだけの事である。ヒトに現われる行動の様相は動物にも現われる。動物では、もっと純粹で、もっと壮烈ですらある。さかりになった動物は、落着きを失い、一切の他物に目もくれず、彷徨し、夜も眠らず、食う事も忘れる。その一途さ、その真剣さは、恋に落ちた人間と同じ状態である。食う事をやめてひたむきに川を遡る鮭に、牝鹿を求める牡鹿の死闘に、われわれは彼らの恋のすさまじさを見るべきではないだろうか。日本猿は階層的組織をもつ集団生活を営んでいるが、生殖期に達すると、牡は上位あるいは同格の牡と異性を争って猛烈な争闘を演ずる。負けた方、恋に破れた牡は群を棄てて、離れ猿になる。いわば出家遁世である。恋の鞘当の見られるのは、鹿や猿だけに限らない。コマルカラスは群をなして生活し、生れて次の春、それは生殖可能になる一年前だが、一年間の婚約期間をすごす。婚約した二羽の、雌の方が雄のうなじの毛を梳いてやつたり、雄の方がおいしい物を雌の口に運んでやつた

り、人目も羨むほどのむつまじい状景と、偶々観察された恋の三角関係の始終とを、ローレンツは精細に記述している。⁽¹⁷⁾ われわれはこうした例を、恋と呼んで差支えないと思う。ローレンツも指摘しているように、この際、動物が人間に似ているのでなく、人間が動物に似ているのである。恋のたわむれとでも言うべき、性行為に先立つ催情行動（ディスプレイ）は、種により定型的な行動様式が定まっているが、これもまた動物が人間に似ているのでなく、人間が動物に似ているのである。序でに付け加えておけば、ハト・カラス・オシドリ・ガン・カモなどに見られる一夫一婦の配偶関係の長期に互る持続、サルの群に見られる三角関係や四角関係——これを乱婚・姦通とみるのは人間的見方であろう——なども、人間が動物に似ている例である。

もちろん動物にも、恋のすさまじさや恋のひたむきな一途さなどの見られない安易な結合、手当り次第行き当りばったりの交尾行動だけのものもある。しかしヒトにしても、なんの感情もない低調な結合が稀ではない。いや、身を焦す熱烈さは、動物よりはヒトの場合かえって稀なのではないか。ヒトは動物に比べて（現代の社会制度の下では）容易に恰好な相手が手にはいるからである。恋の炎は沮害される事のない限り、燃え上らないからである。堰とめられた水の水位があがるように、恋情はせかれて初めて高まるのである。恋の苦しみも逢う瀬のたのしさも直線的な即時行為が妨害されている時のことである。有名な恋物語が非恋失恋であるのは、このためである。

ヒトの恋の場合、特定の一人に志向して他を顧みないことがある。似たような（代替になる）ヒトにも目をくれないというのは、どういう事であろうか。こうした対象選択の狭さ、定着現象は動物にも見られないわけではないが、彼らの選択はもっとルーズで幅をもっているように思われる。が、前述のカラスやガンの場合には、一生のつれあいの例が観察されているし、牝種馬ホップゴブリンは当て馬に恋着して種馬を忌避し仰向けにひっくり返るので、仕方なく当て馬で種付をしたところが、それが後にサラブレットの祖となったというサラブレッド血統史上の有名な話もある。⁽¹⁸⁾ この当て馬、実はルイ十五世に献上された名馬の荷馬車をひくまでに落ちぶれたなれの果てで、牧場主ゴドル

フィン伯はその事実を知っていなかった。驚くべき牝馬の眼力である。私の偶然観察した犬の例では、五六頭の牡犬が一頭の牝を取り囲んで、鞘当が行われていたが、花嫁のお氣にいったのは、人の目にはみすばらしい難種であった。ヒトの場合、一目見た時に恋が発生し、それが定着し続けるというのは、そういう事実はある事はあるが、それは稀れて、何やらわけのわからぬうちに恋になっていたり、ひよんな事で恋が発生したり、定着よりは浮気の事例のほうが一般的のように思われる。定着現象はそれが普通でない故に目立ち、なぜかが問われるのであり、従ってまた作品に取り上げられるのであろう。

ヒトの恋の特異性は、恋が觀念としても現われ、觀念に結晶することである。外に発現しない恋を、われわれは動物に見ることは出来ない。存在しないと断定することは出来ないけれども、ヒトは恋を恋したり、内なる恋を抑えつたりする。肉体は交わっても恋の相手は別だなどという芸当は、動物のよくなし得るところではない。動物は恋に盲目的に忠実であるのに、ヒトは一方で恋をしながら、他方の手で算盤をはじく事も出来る。嫉妬は恋に関係なしに現われ、ヒトの幼児は大体一年四ヶ月くらいでそれを表情に示すが、人に飼われている動物には、親愛の情のほか、嫉妬の素振りを読みとることが出来る。恋の恨みはヒトでは深刻だが、動物では苛める、追い払う、邪魔をする程度の行動表現にみられるくらいである。嫉妬の情の激して物狂るほしいほどになるというのは、多分ヒトの特性である。

以上論旨が多岐枝葉に互ったが、恋は性行為の先触れ、前奏曲である点は、動物一般に共通し、時に一種の狂気状態に陥ることも、ヒトだけに限られた現象ではない。そして、こうした状態こうした行動への解発が、身体的条件に依存し、性関係のホルモンに左右されるという事も、ほぼ間違いないところである。

ところが愛は、その觀念に於てでなく、また觀念的構成に於てでなく、具体的な現実を、その実態を見てゆくと、恋とは全く異質な何かであることが見出される。愛と恋を一緒にした恋愛という言葉は、知性の錯覚に基き、古代民

族の洞察を忘れたものであり、愛にとっても恋にとっても迷惑至極な、迷いと惑いを生じさせるものである。愛は、その本質に於て何であり、その作用機制はどうなっているのか、それはどこから由来するのであろうか。

(三)

愛の日用語としての様々な意味についてはすでに触れた。人はいろいろの者と物とを愛する。妻子弟妹を、召使や友人を、祖国や郷土を、あるいは宝石や金銭を、犬や猫や花を。この世のありとあらゆるものは、あるいは生存もせず存在もしていないものでも、ヒトは愛する。愛は対象に指向し、対象を持つことにおいて成り立つ。愛は一面また愛情と言われるように、心意の或る状態として捉えられるが、その際に同一性が認められるとすれば、指向する対象の差別には拘わりなしに、愛を考えていいようにも思われる。が、果して愛はいつも同質であって、あるのは程度の差にすぎないものであろうか。愛は等しく愛と呼ばれる場合も、恋とは違って、本質的に異なる幾種類もの愛があるのではないだろうか。中でも、自愛（自己愛）と母性愛とは、飛び抜けて別格の愛のように思われる。

いったい自己を愛するとは、愛と呼んでいいものであろうか。これと近縁表裏をなすと思われる言葉には、自己保存の欲求、エゴイズム・利己主義・自我防衛機制・ナルチシズム・身体愛、死にたくない願望などが挙げられる。自己保存と自我防衛は、その実際の適用例をみると、当然そうあるべきものとして考えられ、分かり切った本能として取扱われている。本能、この古くして便利な言葉。本能はかつては理性と対置せられ、本能は動物に、理性は人間に、そして理性は動物に対する人間の優位を証明するものとせられた。本能的行動は、目的を追求する意図的行動と対比的に考えられた。その後、この言葉はあまりに便利に使われたために、即ち記述用語・分類用語としての本能がそのまま安易に説明用語・機能用語として乱用されたために、烈しい反対意見が出され、擯斥の憂目をみた事があった。分類で事足りていた頃に、人間の本能として自己保存（食欲）、種族維持（性欲）その他もろもろの生体を維持

する反射的機能（睡眠・排泄はもちろんクシャミやマバタキの類に至るまで）は本能とせられ、更に群居・羞恥・笑まで本能に算えあげた学者もあつた。⁽²⁰⁾ 幾多の論争の揚句、それらは多く言葉の争であつたが、生来的の固定した一定行動パターンとしての本能が心理学用語として復活したのは近年の事である。⁽²¹⁾ その典型的な、また驚くべき行動の例は、人の知るように多く昆虫に見出されるのである。それはそれとして、疑もなく動物は自己保存的に行動し、ヒトも自分で意識せずに自己保存的に、更に自我拡張的に行動しているが、その際「自分を愛していたのか」と問われても、それが愛だとは、愛していたとはうまく説明出来ないように思われる。意識して行為する場合には、反省に於て自分の利得をはかつていたとは告白できるであろうが、これを愛していたと呼ぶのはどうであろう。強いて言えば、プラスの場合の誇りやかさや生命感の充溢、マイナスの場合には何となき気分のめいりや自我の萎縮感、劇しい場合に絶望感がある。それが自己保存的行為の意識に上る状態であると言えるようだし、それを自己愛だと言えない事もないようである。ただ行為は意識されても、愛だとは意識されないものである。生体の営むあらゆる機能、あらゆる行動は、そのつもりで見れば、すべて自己保存の刻印を見つけ出すことが出来る。種族維持の行動でも例外ではない。それは見方である。防衛も逃走も、攻撃も自己保存的であり、仕事も労働も、遊びですら、この線に乗らないわけではない。自己保存とは一見矛盾する自傷・自殺でも、フロイト的解釈では自我の防衛であり、補償行為であり、難破せんとする自我の脱出手段である。フロイトの指摘したのは病的な心理のメカニズムであるが、健全な精神の場合（例えば武士の切腹）でも、これを自己保存の基盤の上で解釈する事が出来る。純然たる生理的機能（飲食・排泄・睡眠・呼吸など）が自己保存的である事は言うまでもない。その機能の一面は自動調節作用（ホメオステシス）として現われる。こうした機能や行動を、それに伴う快感（例えば、快食・快眠）を、自己愛と呼ぶのは、そう言つて悪いわけではないが、無理な点がある。

自愛・自己愛は通常の意味では、自分を自分の身体を大切にすることである。自分の身体を愛する奇怪な例として

は、口唇愛・肛門愛・性器愛とフロイトの名づけた現象が挙げられる。そこでは性愛と自愛とが合体合流し、というよりまだ未分化の、未発達の状態にあると考えられるのであり、フロイトは彼の快感の原則を立てる根拠に引くのであるが、彼が特に性感・性欲と結びつけ、食欲を無視し棄てているのは肯けない。食物を摂ること飲料を飲むこと、摂り入れたものを排泄する事には、正常の場合快感が伴うのである。

哺乳動物は生れるとすぐ乳首に吸いつく。その様子を観察していると、いかにも快感を感じていらしく見える。マウスからヒトに至るまで、そうである。成長した動物が美味い食物をゆっくり舌なめずりをしながら、或はガツガツ貪り食べている時、明らかに快感を感じている。正常な健康な排便は通例快であり、こらえていた小便を放出するのも快である。すべて生理的機能は順調に経過する際中快感を帯びている。犬やネズミは自分の軀を口で咬んだり舐めたりする。サルやチンパンジーは毛の手入れを熱心に行う（何のためか、その理由は解っていないが）。彼らは負傷した時、舌で嘗める。鳥類は嘴で羽毛の手入れを行う。軀を搔く事を犬は後足で、サル・チンパンジー・ヒトは手でやる。ヒトからの類推では、彼らはそうした場合快感を感じていらしく思われる。快感のために行なっているとは断定し難く、實際上の用・効果を目指しているらしいけれども。以上のような現象を身体愛として自己愛の系列に組み入れるのは、なにかふさわしくないように思われる。とりわけ、これらを愛と呼ぶのはふさわしい言い方ではあるまい。これに倣えば、皮膚愛・指愛・耳愛・眼愛・舌愛という言い方も可能になろう（舌の法楽とか眼福とか、上品な呼び方もある）。唇に限らず、ヒトの皮膚は至るところ快感を感じることが出来る。もっともフロイトの挙げる三つの領域は指の先端と共に触覚神経の末端分枝が、特にそこで分布密度が高いことが知られている。密度が高く、特有の末端形態をなしているのは、快感のみに備えているのでなく、触覚による弁別機能、痛覚の感度をも高めているのである。とにかく、口唇愛や肛門愛と言う場合、ヒトは唇や肛門を、また唇や肛門で愛しているわけではない。愛は快と密接しているようだが、原理的には区別すべき現象ではあるまいか。快感を追求するというのは、一面、事

実は事実だが、それが直ちに愛だとは言えないであろう。にがく苦痛に充ちていても、愛は愛である。愛は快感を追求しているわけではない。フロイトは人の意表に出る穿った見方をし、アトラクティブな用語を發明する才がある事は認めなければならぬが、それが真相を剔抉しているかどうかは別の問題である。

自己を愛する、自分の身体を愛する、という名づけ方は不当である。それは愛という言葉の乱用である。そうした事態に於て見出されるのは、生命の根本衝動であり、自己保存の、ひいて種族維持の線に副う生来的な働きであろうが、それは愛とは違う別のものである。愛するとは、他人を、他物を愛することである。ただ、こうした根本衝動を、便宜的に愛と名づけてもいようにも考えられるが、それはあくまで便宜的にである。自存自衛の線をまっすぐ延ばせば、自己中心的に我を通す事から自分のためをはかる、利己主義に至るように考えられる。そう考えられ易いが、すでに利害得失を較量する段になれば、知性の参加協力を背景に予想せねばならず、知性の演戲が行われる舞台においては、自衛は自衛のために他衛に、利己は利己のために利他への転化が容易に可能であり、事実、世の一見他人のために行われる行為は自分のために行われていることが多いのである。これはしかし後の話である。自存自衛の行動を、ここではまだ原發的な、幼稚な素朴な段階においてのそれとして取り上げているのである。利己愛という言葉をこしらえた人は、言葉そのものが矛盾している事を言葉にはそうした例が多いが、氣付いていないのである。己を利することは、己を愛することではない。利と愛とは、本来かかわりのない言葉であり（概念としては勿論）時には撞着する事すらある。自分の利益をはかる事は、ずつとものちになって、精神の作用がかなり發達してから出現するのであって、自存の根本衝動から直接に導かれる行動においては、利は全然問題にならない。結果は利する事もあり利にならない事もあるが、利を得るために、あるいは利に向って動いていてのではない。そうせざるを得なくて、そうなるほかなりようがなくて、そう動いているだけである。外から見ても、われわれは、それを自己保存的と名づけているのである。自己保存の衝動を、われわれはこのように解する。それは生命的な、生物としての体制と生きてい

る物質の変動に基くある力であり、発現する行動は自由選択の許されないものである。利害得失以前である。利己的行動は確かに―ずっと後になって―発現するが、それは愛ではない。もっとも自分の快感を追求する事も愛と呼ぶ人があるように、自分の利益を追求する事をも愛と呼びたいと言うなら、それはそれで言葉の上だけの問題になるのであるが。そしてそういう用語法は、実際日常語としての愛にあるのである。

以上のような議論はしかし、自己・自我と言われているものを究明してから分析しなければならないことであつた。自己保存と言う時、自己は対象となっていない。自己はそこに「私」として析出区劃されていないのである。動物も、自分と他とを区別しているかどうかは推測される。われわれはそういう意味で自己という言葉を使つてきた。しかし彼らに自我が形成されているかどうかは、犬もサルも、チンパンジーにおいても疑わしいようである。知性の実験的研究から推定すれば、チンパンジーはヒトの幼児四才くらいの能力を示すから、自我の萌芽は形成されていると見る事も許される。ここで自我と呼んでいるのは、端的に言えば観念である。一般に観念はいかにして発生し、いかに形成されてくるのか。抽象・象徴・具体的表象から抽象的観念へ、實在するものとその象徴、古くから多くの人がこの難問と取組み、試論・主張・説明も数多くあるが、ここはこの問題に立ち入る場所ではない。ただ表面的に推測すれば、観念は言葉の発生と相似の経路を辿っているものであろう。但し言葉に表現される観念は、観念の一部にすぎない。論理は言葉の筋道を示すが、観念は論理以前であり、論理に拘束されない。言葉は二個体以上の間に取り交わされ、従つて約束の条件を充たさねばならない。つまり社会的に形成されるから、通貨のように、通貨であるための限定を受ける。観念は通用し妥当する必要があるから、その意味で自由である。観念は矛盾律に抵触して一向差支えない。非論理的観念は無数に発生し、それらは無論理的に、また論理的にからみあう。観念は実体を反映し、また反映しない。虚・妄・幻の観念も、観念としては同格である。あらゆる相反し矛盾する属性が観念に可能である。観念は一見微粒子のように離合集散し、ふくれたりしぼんだり、飛びだしたり固着したり、鎖のように連結し

たり、時には巨大な構造物のような体系にもなる。観念は行動を反映し、行動に反映し、行動を指揮する事も出来る。観念が訂正をうけるのは、行動を通してである。こうした観念の運動に対して、連想学派の立てた法則は、いかにも皮相の解である。古代人は、観念が魔力をもつように思っていたし、フロイトもまた観念に化物のような力を与えている。この一見自明のように見えて、底知れぬ不可解を秘めた観念の中に、自我も観念として現われ、観念として振舞う。自我の形成に至る道程は、個体発生史的に見れば、ヒトの場合、三才から四才の間であらう。成人のヒトはすべてこの道を通っているのであるが、過程は分明でない。「私」という言葉で、自我の観念は碇泊点を得るのであるが、その言葉は最初「私のからだ」を指し、それから軀以上の、軀以外の「私」が他物他者との分別において形成されてくる。私に所属するもの、私の所有するもの、私の占有するもの、総じて「私のもの」が「私」を構成し、後には「私」でなくて、「(私の)もの」が私と同一視される。自我は別の見方をすれば、形成されるものでなくて、発見されるものでもある。

自我が析出区劃されるに至ると、自我と愛との関係は途端に複雑怪奇の様相を呈してくる。愛もまた観念となるし、愛する作用以外の作用、愛以外の情動・情緒も共に自我との関係をもってくるからである。愛の観念が、虚・妄・幻の観念として、他の観念とさまざまな関係を取り結ぶ事は、ほかの観念と異ならないが、とりわけ愛はそれはなほだしいというのは、愛は欲求・願望の対象となるばかりか、愛自身欲求・願望として作用するからであらう。が、何と言っても、ヒトの愛を複雑にするのは、ヒトの所有欲である。動物でも所有・占有が現われないわけではない。恋(性的関係)においては、生物一般を通じて、短かい期間ではあるが異性の相手を占有し、人間の言葉で言えば「私は貴方のもの、貴方は私のもの」と呼んでいい関係が成立する。サルやオットセイの牡が多数の牝を独占するのは所有とっていいかどうか。トゲウオは繁殖のための自分の巢のまわり一帯を、自分の占有領域として他の雄の侵入を許さないし、美しい声で囀る小鳥類は、鳴く事によって、その附近が自分の領地であることを宣言しているの

である。犬は自分のくわえているもの、食べている食物を自分のものとみている。自分の食器の中へ、他の犬が鼻をつつこもうとすると、猛然と反撃する。こうした現象は、それから、食物を貯蔵する二三の動物は、所有の萌芽を示しているようである。チンパンジーに至って、文字通りの所有が現われてくる。ケラーの観察したところでは、牝のチエゴという名のチンパンジーは、特にこの傾向が顕著で、下腹部と股との間に、物を挟んだまま走り廻り、坐って休む時も手放さない。彼女が股ぐらに藏いこむものは、時には赤い布切れ、時には丸いつるつるの石などである。彼女が一旦ここに物を藏いこむと、再び取り戻すことは難しい。彼女がつるつるの丸石を大切にすることは非常なもので、どんな場合にも放さず、夕方には寝室の寝床の中まで持つてゆく。⁽²³⁾丸石はおそらくチエゴにとって、「自分のもの」である。そしてあえて言えば、チエゴは丸石を所有しているだけでなく、愛しているらしく見えるのである。

所有・占有はヒトの場合、恋にも自己保存にも愛の關係にもはいりこんでいる。それが事理を紛糾させ混乱させている。愛しているから占有したくなったり、所有しているから、愛したりする。あるいは、自分ではなくて、自分の「もの」を愛したりする。それは無形の「もの」でも構わない。このような言い方は、普通の日常の言い方でもあり、自己愛を基本に立てて、そこから他を愛する即ち、「愛他」を導き出そうとする論者の立場である。自分の「もの」はもともと自分自身ではないから、ここに他への契機を見ようとするのである。が、前にも言った通り自己愛は別に自分を愛しているわけではなく、結果として自分のためをはかっているかのように見えるのである。仮にそれを愛と名づけても、自愛から愛他へは、そこに飛び越えなければならぬ切断がある。自分に向けられた愛を、方向を切換えて、他に振り向けさえすればいいという単純なものではない。自分と他者とは、甲から乙へ、AからBへと、同じ面にあつて位置だけ違う二者ではない。自我と他我は切り離されていて、比喩的に言つてポテンツがまるで違ふのである。それに自分のためをはかる、自利を追求することは、愛の基本性格、愛の特質と考えられる徴表と相容れない。人によって特質の挙げ方は異なるであろうが、愛は献身的であり、犠牲的であり、無私の奉仕・援助・庇護であ

る事の特徴とする、と私は考える。自愛は、たとえそれを愛と呼ぶにしても、何よりも無私でない点に、根本的な弱味がある。自分を愛するのは、愛の名に値しないのである。自己保存の衝動は愛ではない。自己保存の衝動から愛他へは、そこに切断があつて、容易には架橋できないものとすれば、われわれは愛の現象のもう一つの原型、母性愛からの対象置換を予想しなければならぬことになる。母性愛は初めから明白な対象を持っている。それは子を対象としなければ、子を生まなければ発現しない。子はもともと自分の子である。だから、ここに愛他への対象置換が行われるとしても、ここでもまた、切断があり、飛躍を要するように考えられる。ともかく、われわれは母性愛を一べつして、それから検討することにした。 (未完)

註

- (1) Harlow, H. F. The Nature of Love. *Amer. Psychologist*. 1958, 13, 673-685.
- (2) Harlow, H. F. The heterosexual affectional System in Monkeys. *Amer. Psychologist*. 1962, 17, 1-9.
Harlow, H. F. and Zimmermann, R. R. Affectional responses in the infant Monkeys. *Science* 1950, 130, no. 3373.
- (3) 伊谷純一郎 高崎山のサル 昭和二九年 光文社
水原洋域 日本ザル 昭和三二年 三一書房
- (4) 間直之助 猿の愛情 昭和二九年 法大出版局
- (5) 愛の変態現象・異常性欲から愛の本質を究明できるという主張もある。フロイド自身こうした見地に立っているし、その実行者でもある。しかし彼の誤謬は病的現象にのみ通用する病的メカニズムを、正常な愛の諸関係の基底にも持ちこんだことにある。例えばエヂプス・コンプレックスである。それが彼の生きた時代、彼の住んだ文化圏の特殊な事情から由来する特異なものである事が、文化人類学的調査により立証されつつある。また同性愛は異常な現象であるが、その事から正常な異性愛は少しも理解されないものである。
- (6) ネズミの母性愛の強さを、飢の程度や電撃で測定しようとした試みが為されている。

(1)

(7) 曹 植 國 皇 篇「沈吟有聲」

(8) Beach, F. A. Instinctive Behavior: Reproductive activity. (S. S. Stevens edit. Handbook of Experimental Psychology 1951, p. 387-434).

Beach, F. A. Hormones and behavior. New York: Hoeber, 1948.

(9) Feiner and Rothman, Study of male castrate. *J. Amer. med. Ass.*, 1939, 113, 2144-2146.

Tauber, E. S. Effects of castration upon the sexuality of the adult male. *Psychosom. Med.*, 1940, 2, 74-87.

(10) Clark, G. Prepubertal castration in the male chimpanzee, with some effects of replacement therapy. *Growth*, 1945, 9, 327-339.

(11) Carpenter, C. R. Sexual behavior of free ranging Rhesus monkeys. I. Specimens, procedures and behavioral characteristics of estrus. II. Periodicity of estrus, homosexual, autoerotic and nonconformist behavior. *J. Comp. Psychol.*, 1942, 33, 113-162.

(12) Yerkes, R. M., and J. H. Elder. The sexual and reproductive cycles of chimpanzees. *Proc. nat. Acad. Sci., Wash.*, 1936, 22, 276-283.

(13) Clark, G. (Personal communication between Beach)

(14) Davis, K. B. Factors in the sex life of twenty two hundred women. New York: Harpers, 1929.

Stopes, M. C. Married love, New York: Putnam, 1931.

Dickinson, R. L. A thousand marriages: A medical study of sex adjustment. Baltimore: Williams and Wilkins, 1931.

(15) Filler, W., and N. Dreznar. Results of surgical castration in women over forty. *Amer. J. Obstet. Gynaec.*, 1944, 47, 122-124.

(16) 前 掲 間 直之助 日 本 ザ ル

(17) Loreng, K. Z. King Solomon's ring. New York, T. Y. Crowell, 1952. (translated by Marjorie Kerr Wilson).

ンロギンの指環 日 高 敏 隆 訳 昭 和 三 八 年 早 川 書 房

(18) 同 右 ソロモンの指環

(19) 間 直之助 馬の表情 昭和二九年 法大出版局

(三)

(20) McDougall, W., *Introduction to social psychology*. 1908.

(21) Birney, R. C. and R. C. Teevan edit. *Instinct*. Princeton, van Nostrand. 1962.

(22) Köhler, W. *Intelligenzprüfungen an Menschenaffen*. Berlin, Springer. 1917.

類人猿の知恵試験 宮 孝一 訳 昭和三十七年 岩波書店

(23) 同 右、猿人類の知恵試験